

博士論文概要

論文題目

クメール古代都市イーシャナプラの研究
Study on the Ancient Khmer City ISANAPURA

申請者

下田	一太
ICHITA	SHIMODA

--

アンコール遺跡群は多数の寺院遺跡や溜池，水路などによる複合的な施設として，東南アジアでも際だって大型で重要な史跡として知られている。この遺跡群を形作ったアンコール王朝の前身として，六世紀から八世紀にかけて栄えた「真臘国」あるいは「チェンラ」と呼ばれる勢力があった。この真臘国の全盛期の首都に比定されているのが「イーシャナプラ」と呼ばれる古代都市であり，現在ではサンボー・プレイ・クック遺跡群と呼ばれている都城址である。

七世紀に成立した中国の正史『隋書』には，南海諸地の一つとして，真臘国に「伊奢那城」と呼ばれる王都があったことを伝えている。遺跡群内から発見された碑文には，イーシャナプラあるいはイーシャナプリに関する記載が認められ，伊奢那城への比定を裏付けている。また漢籍史料に記された，「都市の東に神域を設ける」という記事の内容と，実際に確認されている都城の構造とが一致していることもこの比定を支持しているが，なによりプレ・アンコール時代の都城址としてここサンボー・プレイ・クック遺跡群に代わる大規模なサイトが他に見あたらないことが王都に比定される強い論拠となっている。

古代都市イーシャナプラには，煉瓦造の祠堂により複合的な伽藍構成が形成され，各遺構の施工精度や意匠の洗練度はアンコール時代の煉瓦造遺構と比較してかえって高いほどであり，一つの完成型に達していると思われる。それまでの遺構からは飛躍的に発展しており，東南アジアにみられる同時代の遺構の中でも寺院の構成等が著しく充実しているがために，ひるがえってこの遺跡群が既に七世紀に成立していたことに対して一部には疑問の声も残されているが，漢籍史料・碑文史料・美術様式・建築様式・発掘調査による年代測定などのいずれの面からも十分に七世紀の遺跡としての証左が得られるものであり，首長世界から専制国家への展開，そして外来文化の受容とクメール造形文化の国風化への展開を考える上で，メルクマールとなる遺跡群であることは疑いようがない。

当遺跡群は19世紀末に発見されてから後，20世紀前半にフランス極東学院の研究者によって調査が行われ，プレ・アンコール期における最重要の遺址として注目されてきた。しかしながら，近年改めて進められてきた早稲田大学を中心とした調査によって，過去の認識は都市全体の一部の痕跡に留まることが確認され，王都イーシャナプラの全容について，より鮮明な構造や歴史観が明らかになりつつある。本論考はそうした近年の新たな調査結果の中でも，「都市の中核地区の空間的な構造」，「都市の後背地をなす痕跡の分布」，そして「都市内でも最大の平面規模を有する寺院の構成と改変」について，各章を通じて分析しようとするものである。

第一章では古代都市イーシャナプラの空間的な構造について分析した。現地踏査によって，新たに多数の組積造遺構，土手痕，水路痕，溜池などが記録された。こうした遺構の多数は，かなり広域に分布しており，河川や高台といった地形条件や，都城の外郭を示す環濠の配置をもとにすると，これらの遺構の分布は「寺

院区」「北寺院区」「都城区」に区分すると適当であることが推測された。

寺院区はこれまでもよく知られていたが、過去の記録は、今回新たに確認された遺構の全てを網羅しているものではなかったため、補足的な記述を加えた。また寺院区内でもプラサート・サンボーが最も上位の位置付けにあり、国家寺院として中心的な存在であった可能性について、寺院区内の各伽藍の配置や、伽藍内の構成要素の特徴から示した。

北寺院区は、これまでもローバン・ロミアス遺跡群について知られていたが、この遺跡群内の各祠堂の建造年代や増改築の様子について詳細な考察を加えた。また、この地区には過去には確認されていなかった多数の遺構が記録されたが、中でも M.45 と番付される寺院サイトでは発掘調査を実施し、アンコール時代に増築された施設が含まれることを確認した。ローバン・ロミアス遺跡群と M.45 の両サイトは、この地区の東側を南流しているオー・クル・ケー川と関係を有する施設をもち、ローバン・ロミアス遺跡群に対しては、河川を堰き止める貯水池が、また M.45 サイトは、河川から水路へと取水する施設と関係していることが確認された。この他にも宗教施設と水利施設とが密接な配置関係を示しているサイトが認められていることから、遺跡群の各所で認められる水管理施設は宗教施設と一体的に造営され、同一の管理体制下にあった可能性を指摘した。

都城区については、過去にも環壕に囲繞された地区の存在が知られていたものの、既往調査は皆無であり、初めての踏査となった。都城内では計 56 サイトが記録された。発見された彫刻装飾を伴う部材の多くはプレ・アンコール時代の様式を示すものであったため、寺院区と同時代に都城区もまた造営されたものと推測された。都城の外郭構造をなす環壕と、その内側の周壁の構造は、防衛上の効果はさほど期待できないもので、この王都を中心とした勢力は拮抗する外敵を持たず、防衛にはさほどの苦慮を要さなかった様子が推測された。また、環壕の内外を往来するための土手痕を、西辺中央の一カ所と東辺の三カ所に確認した。西辺中央の施設は第二章に考察する内陸地への古道の出発地点にあり、漢籍史料に記されている王都の「西門」にあたる施設であることが推測された。また、東辺の土手痕のうちの二筋は、都城内の M.75 寺院サイトと、寺院区内の主要施設であるプラサート・サンボーとプラサート・イエイ・ポアンとを結ぶ線上にあり、M.75 サイトが寺院区と都城区を連結する上で重要な役割を果たしていた可能性を指摘した。このサイトの発掘調査でもやはりプレ・アンコール時代以降の増改築の痕跡が認められており、都城内でも重要な施設では、後世に改変が加えられながら、使用され続けていた経緯が確認された。

その他、第一章では北東に離れて立地するサイトや、聖山「陵伽鉢婆」の所在について考察を加えた。イーシャナプラの都市構造を俯瞰するならば、一つの重要な特徴として「宗教地区と政治や交易を司る政経地区とが並立して国家の中心となる都市を形成している」ことが指摘されうる。つまり、ここでの都市計画は

「政祭一致の支配原理をそのまま都市構造へと反映させた」ものと見做すことができる。そしてそれら二つの支配要素は、宗教施設として荘厳化された「表」をなす地区と、その背後に控えた実質的な支配機構である「奥」の地区とに分化されていたようである。特に表玄関となるべく寺院区は、外国の使節が来訪するセン川からのアプローチにおける、景観作りの重要な施設として、長大な参道と共に国家の威信を示すべく配置されたものと考えられた。

第二章では、遺跡群周辺の空中写真の観察と、地上での現場確認を通じて、古代都市イーシャナプラの中核地から周囲にかけてどのような痕跡が広がっているのか考察した。中でも、都城の西辺中央から延びている古道の追跡調査と、周辺に広がる溜池や畦畔^{けい はん}痕の分布に注目した。これまでもイーシャナプラとアンコール遺跡群とを繋ぐ王道の存在が指摘されていたが、実際には、この王道はイーシャナプラへは連結していないことが確認された一方、別の土手道が王道とほぼ平行して走り、これがアンコール地区でもプレ・アンコール時代の遺跡が多く認められる西バライの南側の地区へと連結していることが明かとなった。また、溜池や畦畔痕は、古道の周囲に途切れることなく分布しており、消費地である王都を支える後背地が都城の周囲に連綿と広がっていた様子が推測された。フナン王朝からチェンラ王朝へと移行した際に築造されたここイーシャナプラは、港市国家的な性格を残しつつ、それに農耕という新たな主力産業を組み込むことで大がかりな都市生活を支えるための余剰力を確保し、さらに大型の宗教施設の建設をも可能としたようである。つまり、チェンラ王朝はフナン王朝と、後のより内陸国家的性向を強めることになるアンコール王朝との間で立地や時代的な中間点にあるばかりか、国家社会構造としても中間的な位置付けにあると推察された。

第三章では、プラサート・サンポー内の発掘調査の結果を整理し、寺院の建立当初の復元考察と、各所に認められた増改築の痕跡について、その前後関係を分析し、また碑文や彫像といった年代推定に有用な遺物と関係づけることでそれらの改変の実年代の特定を試みた。7世紀、イーシャナヴァルマン一世によって建立されたこの寺院は、10世紀にラージェンドラヴァルマン二世の治世期に主尊の交代を伴う改宗がおき、祠堂に施された装飾彫刻の改修や、彫像の置き換えが大々的に行われたようである。こうした改変によって、現在では水平に展開しているこの寺院が、当初は寺院周囲から主祠堂の建つ中心部へと階段状に地面を高めてゆく段台型の寺院形式を示していた可能性が推察された。つまり、主祠堂を中心に副祠堂などの各施設を周囲に配し、さらに多重に周壁を巡らせるこの平面形式が当寺院によって突如としてクメール寺院において出現したことに加えて、最終的にはアンコール・ワットやバイヨンにも至る段台型の立面形式がここに既に成立していたことになり、クメール建築における複合寺院化の初現段階にしてすでに一つの基本的な特徴を示す要素が形成されていたことが指摘された。